Japanisch

Sisi Museum

EXPERIENCE THE IMPERIAL HOFBURG

ようこそ！これから、ウィーン・ホーフブルク王宮の皇帝の部屋見学コース、シシィ・ミュージアム、銀器コレクションに、ご案内申し上げます。

SISI MUSEUM

シシィ・ミュージアム

1854年4月、バイエルン公爵家の姫君エリーザベトがウィーンに到着しました。まだ16才の彼女は、従兄のフランツ＝ヨーゼフ皇帝と結婚することになっていたのです。婚礼の後、ホーフブルク王宮を住まいとした彼女は、突然、オーストリアの宮廷生活と直面することになりました。 これからシシィ・ミュージアムにご案内申し上げましょう。次の6つの部屋で、シシィをめぐる神話と真実をご覧ください。 写真撮影は禁止されていますので、ご了承ください。

第一の通路

31 突然の死

1898年9月10日、悲報がヨーロッパに広がりました。オーストリアのエリーザベト皇后が暗殺されたのです。 エリーザベト皇后の暗殺事件は、周囲から誤解された類稀な女性の波乱に満ちた生涯に終止符を打つものでした。他方、彼女の悲劇的な死は、シシィをめぐる伝説形成に決定的な役割を果たしました。もちろん彼女自身も、存命中の型破りな生活によって自ら伝説を生み出しました。伝説は、どのように形成されたのでしょうか？天衣無縫に育った美少女が、いかにして、人生に失望し死に憧れる放浪者となったのでしょう？これから私たちも、エリーザベト皇后の魂の遍歴をたどりましょう。

第二の通路

32 伝説の誕生

前後のボードに展示された新聞の切り抜きは、当時の新聞に掲載された皇后に関する報道を集めたものです。ここから明らかなのは、存命中の彼女が、決して愛され親しまれ新聞のトップを飾る存在ではなかったことです。エリーザベトは、早くから皇后たる公的役割を避け、晩年はウィーンで過ごすことも稀で、殆ど報道されることはありませんでした。また、王朝時代の新聞は厳しく検閲されたので、皇后に対する批判なども不可能でした。他方フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、勤勉に自らの責務を果たし、「善良な老皇帝」として国民に親しまれていました。従って皇后暗殺の報道においても、国民の同情は、次々と不慮の事故で身内を失った皇帝に集中していました。人々から敬愛される献身的なエリーザベト皇后のイメージは、暗殺事件以降に形成され、この虚像が後世に伝えられました。

33 イコンの普及

エリーザベト皇后の存命中、人々は、身を引いて暮らす「風変わりな」皇后に全く無関心でした。漸く彼女の没後、テロリストに暗殺された悲劇の美女というイメージのマーケッティングが可能となりました。彼女の面影を偲ぶ記念の肖像画、記念のコイン、その他様々の記念品が急速に普及しました。

34 記念碑

エリーザベトの没後、数多くの記念碑が建てられました。ウィーンに先立ってブダペストでは、エリーザベト女王記念碑のため、既に1901年と1902年、2回のデザイン・コンクールが開催されました。この活動や、ザルツブルクにおける同様の動きに刺激され、ウィーンでも記念碑建設委員会が設けられました。相応しい設置場所をめぐって意見が食い違う中、皇帝は、国民庭園を選びました。

35 彫刻家クロッツの立像

ザルツブルクで制作された控え目な立像にヒントを得たのは、ウィーンの彫刻家ヘルマン・クロッツで、彼は、立像に動きを加えました。「気品に満ちて優雅に歩む皇后」は、等身大のほか小型の彫像としても制作されました。クロッツのエリーザベト像は高く評価され、小型の彫像は、シェーンブルン宮殿の皇帝の執務室にも飾られていました。ここに置かれた等身大の立像は、皇后の娘婿であるフランツ・サルヴァトール大公から共和国へ寄贈されたものです。

36 映画に描かれたエリーザベト

とりわけ、彼女の物語が映画化されヒットすると、愛される「シシィ」のイメージが全世界に広がりました。その典型的な例は、1950年代にエルンスト・マリシュカが制作した3部作で、シシィを演じたロミー・シュナイダーは一躍、映画界のスターとなりました。この映画に登場する、若く屈託の無い愛すべきシシィのイメージは、当時から今日に至るまで広く普及しています。けれども、歴史上のシシィと合致するのは、映画のごく一部に過ぎません。
これから、歴史上のエリーザベトを訪ねることにいたしましょう。

第一室　少女時代

37 バイエルンの少女時代

エリーザベトは1837年12月24日、ミュンヘンで生まれました。父はバイエルン公爵マクシミリアン、母はバイエルン王の娘ルドヴィカです。家族からシシィの愛称で呼ばれたエリーザベトは、多くの点で父親に似ていました。庶民的な公爵は、自然を愛し、熱心な馬術愛好家で、好んで旅に出掛けました。少女時代のシシィは、ミュンヘンの宮殿とシュタルンベルク湖畔のポッセンホーフェン城に住み、堅苦しい宮廷の作法や儀式とは無縁に伸び伸びと育ちました。
2才年下の弟カール・テオドールは、家族の間で「ガッケル」と呼ばれていました。エリーザベトは生涯にわたって、この弟と特に親密な関係にありました。左手のショーケースには、姉弟を描いた水彩画が見られます。この絵でエリーザベトが着ている子供服のレプリカも、この部屋に展示されています。

38　　バート・イシュルでの婚約

1853年夏、シシィの母と、ネネの愛称で呼ばれた姉ヘレネがバート・イシュルへ向かい、シシィも同行しました。これはフランツ＝ヨーゼフ皇帝の23才の誕生日を祝うためでしたが、本当の目的は、姉妹である双方の母親が計画した皇帝の花嫁選びでした。2人の母親の計画では、フランツ＝ヨーゼフとネネが婚約するはずでした。母親の予定とは裏腹に、フランツ＝ヨーゼフ皇帝は15才のシシィに一目惚れしたのです。こうしてフランツ＝ヨーゼフはシシィに求婚しました。返事を求められたシシィは、わっと泣き出しました。
「どうして、彼は私のことばかり考えるのでしょう。私は取るに足らない人間です。私も皇帝が大好きです。ああ、彼が皇帝でなかったら良いのに！ 8月19日には、正式の婚約式が行われました。突然人々の視線を一身に集めたシシィは、おびえて殆ど無言でしたが、他方、フランツ＝ヨーゼフは有頂天になりました。皇帝の母ソフィー女大公は、シシィの置かれた立場を良く理解していました。一般には、女大公が息子の選択に反対だったとされますが、実際には、幸せそうな息子の様子を見て、彼女も2人の婚約を喜んでいました。

39　　ポルターアーベントのドレス

イシュルでの婚約後、バイエルンに戻ったシシィのため、早速婚礼の準備が始められました。 先ずシシィは、オーストリア皇帝の妃として必要な知識や作法を学ばねばなりませんでした。これとともに、ウィーンの宮廷に対するシシィの不快感と恐怖も強まりました。彼女は、バート・イシュルでの婚約とともに、世界史の舞台に押し出され、プライベートな自由を失ったことに気付いたのです。 エリーザベトの衣装で、今日まで保存されているものは僅かです。そのひとつが、いわゆるポルターアーベントのドレスで、ここに展示されているのは複製です。オリジナルは美術史博物館にありますが、保存上の問題のため、もはや一般には公開されていません。エリーザベトはこの見事なドレスを、ウィーンへ旅立つ前の送別会に着用したものと考えられています。興味深いのはオリエント風に装飾されたストールで、スルタンのシンボルのほか、アラビア語で「おお神よ、何と美しい夢だろう」と刺繍されています。

第二室　宮廷

40 婚礼

1854年4月24日の婚礼とともに、エリーザベトにとって全く新たな人生が始まりました。厳格な式典の数々、大群衆の視線と期待の重圧が、彼女を押しつぶしました。皇后としての最初の公式レセプションで、すっかり消耗した彼女は、涙の発作に襲われ広間を去りました。フランツ＝ヨーゼフには、シシィと過ごす時間が殆ど無く、彼女は、たちまち深い孤独に陥りました。 エリーザベトも当初は、彼女に寄せられた期待を満たそうと努力しました。皇帝夫妻は4人の子供をもうけましたが、長女のソフィーは早くも2才で夭折しました。エリーザベトは絶望しましたが、自らの感情を押し殺さねばなりませんでした。皇后としての公式の役割の方が、個人的な感情より重視されたからです。

41 Raab

壁には、画家ゲオルク・ラープの作品が見られます。これは1879年、皇帝夫妻の銀婚式を記念して制作されたもので、名高いルビーのアクセサリーが描かれています。これは、もはや存在しないハプスブルク家の財宝のひとつでした。絵の横の展示台に見られるのはレプリカです。

42 ウィンターハルター

若き皇后は、不眠症、食欲不振、長く続く咳に悩まされるようになりました。肺病を恐れた医師の勧めにより、彼女はマデイラ島で転地療養することになりました。こうしてシシィは結婚以来初めて、あらゆる責務から解放され、堅苦しい宮廷を遠く離れて、自らの生活を楽しむ機会を得ました。 2年間の転地療養中に奥深い内的変化を体験したエリーザベトは、全く別人としてウィーンの宮廷に戻りました。愛らしく臆病で塞ぎがちな少女は、自覚と誇りに満ちた美女となったのです。この時期、画家フランツ＝クサヴァー・ウィンターハルターが一連の肖像画を制作しました。疑いも無く最も有名なのは、1865年に制作された肖像画です。エリーザベトは「星のドレス」と呼ばれる豪華な舞踏会衣装を着け、ダイアモンドをあしらった星型の髪飾りが印象的です。 エリーザベトは、ダイアモンドの星27個のセットを持っていましたが、これは、後にルドルフ皇太子の娘である孫娘のエリーザベト女大公に相続されました。ショーケースの中には、再現されたダイアモンドの星が見られます。

43 ハンガリー女王

エリーザベトは、その美貌を武器として繰り返し、自らの願望を実現しています。一般的に彼女は、現実の政治には無関心でしたが、生涯に一度だけ、夫の政務に介入しました。彼女の願いは、ハンガリーを解放することだったのです。エリーザベトは、快活で誇り高いハンガリー人に深い親愛感を抱いていました。1849年に革命運動が鎮圧された後ハンガリーは、ハプスブルク皇帝の絶対主義的支配に苦しんでいました。こうした背景から、彼女は熱烈なハンガリー支持者となり、ハンガリーの主導的政治家とも親交を結んでいました。1866年、フランツ＝ヨーゼフはハンガリーとの調停に踏み切り、その歴史的権利を承認して王朝内での独立を認めました。こうしてオーストリア＝ハンガリー帝国が成立しましたが、その背後には疑いも無く、エリーザベトの尽力がありました。1867年、ブダペストのマーチャーシュ教会で戴冠式が行われ、エリーザベトもハンガリー女王に即位しました。

44　ハンガリー女王の戴冠式の衣装

ハンガリー女王として描かれたエリーザベト皇后の肖像画の前に、もうひとつのドレスが見られます。これは、戴冠式に着用されたハンガリー女王の正装です。これは、パリのオートクチュール「ワース」で仕上げられたものです。 マーチャーシュ教会での戴冠式を終えたフランツ・ヨーゼフとエリーザベトが、群集の前に姿を現すと、万歳を意味する「エーヤン」の歓声が沸き起こりました。他方エリーザベトは、素早く公衆の面前から姿を消しました。これは、重い戴冠式のドレスから、軽いチュールのドレスに着替えるためでした。 展示台には、ハンガリー女王戴冠式に用いられたアクセサリーのレプリカが見られます。オリジナルは、もはや存在しません。

45 公的役割

エリーザベトは、嫌々ながら皇后としての責務を果たしました。公的な場に出るのは不愉快で、宮廷のセレモニーは重圧でした。更に彼女は、ウィーン宮廷の堅苦しい身分制度と陰謀を嫌悪しました。公的な場に出席するとシシィは、彼女自身の言葉によれば「馬具を付けて引き回される馬」のような苦痛を感じたのです。

第三室　逃避

46 乗馬

皇后はウィーンの宮廷を避け、スポーツ、美容、旅へと逃避しました。 幼少期からエリーザベトが大きな情熱を傾けたのは乗馬でした。既に少女時代、彼女は父親から曲乗りを学びましたが、今や厳しいトレーニングを重ね、当時のヨーロッパでトップを行く最も大胆な女性騎手となりました。彼女の冒険的な乗馬は、しばしば可能な限界に迫るものでした。明らかにエリーザベトは、乗馬という高度のスポーツ分野において、自らの限界に迫ろうとしたのです。その際、彼女は意図的に、極めて危険な場面に身を投じました。

47 美貌

エリーザベトは、当時のヨーロッパで最も美しい女性のひとりとされ、しかも、このことを十分自覚していました。日常生活の大半の時間は、その美貌を守るために費やされたのです。エリーザベトが特に自慢としたのは、殆ど踝（くるぶし）に届く豊かな髪でした。この髪をとかし編み上げるには、毎日2～3時間が必要でした。 人々から賛嘆された美貌を守るため、エリーザベトは数々の美容法を試みました。彼女は、非常に奇抜な方法をも積極的に実行しています。例えば、皮製のマスクに当てた子牛の生肉でパックしたまま睡眠しました。 エリーザベトは、彼女のスリムなボディーラインを保つため、最大限の努力を払いました。このため、身長172センチの彼女の体重は、生涯45キロから47キロに留まりました。ウエストも、51センチという驚くべき細さでした。 エリーザベトは体重を保つため、様々なダイエットを試みました。その際、最も重要な役割を果たしたのが体重計です。彼女は毎日体重を量り、年とともに、ますます厳格なダイエットを実行しました。もちろん、エリーザベトが生の肉汁を飲んでいたというのは、大袈裟なうわさに過ぎません。アヒルのガラ絞り器を利用した子牛もも肉の汁は、調味・加熱の上、食卓に供されました。細身を保つためエリーザベトが、いつも飢えていたというのも伝説のひとつでしょう。様々の菓子屋からの請求書が示す通り、エリーザベトはチョコレート菓子やアイスクリームが大好きでした。

48 健康

ボディラインを強く意識し、スポーツを愛好した皇后は、しかし常に医師の治療を受けていました。良く手入れされた歯が、健康な体と美しい容貌に欠かせない要素であることは、彼女自身良く自覚していました。皇后専属の歯医者が用いていた器具や、側近であるフェレンツィ伯爵夫人の手紙から、定期的な治療の様子を知ることができます。

49 渦中の人

1889年、唯一の息子であるルドルフが悲劇的な自殺を遂げると、エリーザベトは、ますます傷つきやすくなり、他人との接触を嫌って引きこもり、近づきがたい存在となりました。彼女は黒いドレスのみを着用するようになりました。

50 扇子と喪服のアクセサリー

扇子、ヴェール、日傘は、極く早い時期から、外出の必需品となりました。皇后は、これらによって、人々の好奇の目を避けようとしたのです。生まれつき内気で人目を嫌う彼女の性格は、年とともに強まり、やがて、好奇心に満ちた群集のみならず、彼女の崇拝者や宮廷の役人に対しても、強い恐怖心を抱くようになりました。
皇后は喪服に合わせて、黒いビーズと黒玉のアクセサリーを身につけました。これは、決して高価な宝石を使ったものではありません。控え目な素材と、簡素な細工の中に、世を避けて喪に服する人の悲しみが表されています。

51 避難所

エリーザベトは、時とともに、宮廷でも自らの意志を貫くようになり、彼女のイメージに合った生活を始めました。今や彼女は、自ら望むことのみ実行し、皇后たる役割を繰り返し拒否するようになったのです。皇帝夫妻の間柄は疎遠となり、エリーザベトは、皇帝に力添えするため必要な夫への親近感を失っていました。 エリーザベトの側近であったフェステティッチ伯爵夫人は、皇后の生活態度に胸を痛めていました。「皇后様は夢の世界に浸り、悩むことを日課にしていらっしゃいます。」
エリーザベト自身は、際限の無い大海原に憧れ、カモメのように自由に旅することを夢見ていました。「私はカモメ、陸地に私の故郷は無い・・・」
自らの心を紛らわせるため、エリーザベトは長期間の旅行に出掛け、自由に暮らせる土地に避難所を求めました。ブダペスト郊外のゲデレー宮殿、ウィーンのラインツにある狩の館ヘルメスヴィラ、更にエーゲ海に浮かぶコルフ島のアキレイオンなどが、彼女の避難所でした。アキレイオンは、エリーザベト自らの注文で建てられたポンペイ・スタイルのヴィラで、その名前は、彼女お気に入りのギリシャ神話の英雄に因んだものです。ところが皇后は、ここにも安住することが出来ず、ヴィラの売却を考えていました。実際に建物が売却されたのは、彼女の没後でした。

52 ティタニア

少女時代から詩を書いていたエリーザベトは、ますます、夢想的なポエジーの世界に逃避するようになりました。彼女はホメロスの叙事詩を愛し、崇拝するハインリヒ・ハイネにインスピレーションを得て数多くの詩を書き残しました。その中には、彼女の失望、苦悩、憧れに加え、周囲の人間に対する軽蔑と、ますます深まる孤独感が表されています。 エリーザベトは、シェークスピアの「真夏の夜の夢」に登場する妖精の女王ティタニアに自らを投影するようになりました。他方フランツ＝ヨーゼフは、愛する妻のため、ラインツの森の一角にヘルメスヴィラを建設、その寝室には「真夏の夜の夢」をモチーフとする壁画を描かせました。彼女は、このヴィラを「ティタニアの魔法の城」と呼んでいました。

53 旅から旅へ

「同じところに坐っているのは嫌」とエリーザベトは書き残しています。 遥かな土地に対する彼女の憧れは、ますます強くなりました。ウィーンから離れれば離れるほど、彼女の心は軽くなりました。健康状態が良くないことを口実に、エリーザベトは大規模な旅行を繰り返しました。本当の目的は、見知らぬ国々と異国の文化に接することだったのです。とりわけ彼女は船旅を愛し、陸地から遥か離れた大海原で、自然に抱かれた快感を味わいました。彼女が愛用した大型ヨットのデッキにはガラス張りのパビリオンがあり、ここからは周囲の風景を見渡すことが出来ました。乗組員が皇后の身を案じるほどの嵐になると、エリーザベトは、パビリオンの椅子に彼女を縛り付けるよう命じました。「これは、オデュッセウスと同じ方法です。さもないと、波が私を呼び寄せるからです。」

54 旅の常備薬

皇后の旅の装備には、63の内容からなる薬箱が含まれていました。その中には、カラシを用いた湿布用の膏薬、ガーゼの包帯、クリーム類、薬の小瓶など多くの薬品に加えて、コカイン注射のセットが見られます。現代の人々にとっては奇妙なことですが、当時は、麻薬類が医薬品として利用されていました。コカインの場合、痙攣を緩和し気分を明るくする効果が知られていたため、月経困難症の場合や更年期における、静脈注射として使用されていたのです。

55 お召し列車

船旅には注文をつけなかったエリーザベトですが、彼女専用のお召し列車は極めて豪華に内装させ、この列車でヨーロッパ中を旅行しました。ここに再現された彼女のサロンをご覧ください。オリジナルままに保存された寝台車は、産業技術博物館に展示されています。

56 旅の目的地

「旅の目的地が重要なのは、その間に道程（みちのり）が有るからです。もし何処かに到着した後、そこから二度と出発できないなら、天国のように素晴らしいところでも、私には地獄となります。」エリーザベトは、このように書き残しています。
彼女は、ますます旅から旅へとさまようようになり、家族と側近の人々も、憂いに沈んだ皇后の身を案ずるようになりました。1897年、末娘マリー＝ヴァレリーは日記に次のように記しています。「困ったことに、ママは以前よりも一層ひとりでいることを好み、悲しい話ばかりするようになった。」
また1898年5月の日記には次の文章が見られます。
「・・・以前には時々現れるだけだった深い悲しみが、もうママから離れなくなってしまった。今日もママは、度々死にたくなると話していた・・・」

57 暗殺と埋葬

1898年9月、エリーザベトは保養のため、数週間に亙りモントルー近郊のテリテに滞在しました。9月9日、彼女は側近のイルマ・スタライ伯爵夫人を伴いプレニーに足を伸ばし、ロートシルト男爵夫人を訪問しました。その晩エリーザベトはジュネーブに向かいました。ここで一泊し、翌日モントルーへ戻る予定だったのです。いつもの通りエリーザベトは、ホーエネムス伯爵夫人の偽名を使い、お忍びで、レマン湖畔のホテル「ボー・リヴァージュ」に泊まりました。ところが、どこからか「オーストリア皇后滞在」の極秘情報が漏れ、翌日の新聞に報道されました。この記事を読んだ一人が、ルイジ・ルッケーニでした。彼はイタリアのアナーキストで、フランスのオルレアン公を暗殺するためジュネーブに来たのです。土壇場で旅程を変えたオルレアン公はジュネーブには現れませんでしたが、ルッケーニは失望しませんでした。偶然にもオーストリア皇后という素晴らしい犠牲者を見つけたからです。 9月10日の午前中、エリーザベトはお気に入りの菓子店で買い物をしました。モントルーに向かう正午の船に乗るつもりだったのです。船着場へ向かう湖畔の道で待ち伏せていたルッケーニは皇后に飛び掛り、研ぎ澄ましたヤスリで胸を突き刺しました。 エリーザベトは倒れましたが、ただ驚いただけで再び立ち上がりました。単に突き倒されたものと思ったのです。彼女は乗り遅れないため先を急ぎ、乗船した直後に倒れました。彼女の胴着が開けられ、初めて小さな刺し傷が発見されました。船は直ちに引き返し、瀕死の皇后は再びホテルに運ばれましたが、まもなく息を引き取ったのです。 訃報に接したフランツ＝ヨーゼフは、側近に対し言葉少なに語りました。「私が、どれほど彼女を愛していたか、君には分かるまい。」
 エリーザベトの亡骸はウィーンに運ばれ、カプツィーナ墓所に安置されました。その悲劇的な最期によって、彼女は不滅の人となったのです。存命中の彼女に対する批判は影をひそめ、残されたのは、神々しい絶世の美女の思い出だけでした。こうして、シシィ伝説が生まれたのです。

皇帝の部屋見学コース

58 護衛官の控え室

ここから、皇帝夫妻の歴史的な居住空間が始まります。先ずはフランツ＝ヨーゼフ皇帝の一連の部屋で、その後にエリーザベト皇后の部屋が続きます。

59 謁見の間、控え室

フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、自らの住まいとして帝国官房宮を選びました。ここには数々の執務室とプライベートルームがあり、皇帝は1916年に世を去るまで、ここで暮らしました。 皇帝は週に2回謁見を行いました。謁見の日は新聞に公示され、謁見を許された人は指定の日時に、豪華な皇帝の階段を通って、この部屋に入り、謁見の間に呼ばれるのを待ちました。 壁の3面には、豪華な壁画が見られます。これは1832年ヨハン＝ベーター・クラフトが制作したもので、オーストリア皇帝フランツI世の生涯から歴史的な出来事を描いたものです。

60 謁見の間

皇帝は、ここで人々を迎え、書見台の前に立って謁見を行いました。書見台の上にはリストが置かれ、その日訪れる人々の名前と来訪の理由が、謁見順に記されていました。こうして人々は、直接皇帝に話し掛けることが出来たのです。その内容も、勲章を受けた感謝、家族に対する恩赦の願い、個人的な用件など、様々でした。皇帝は午前中に100人に上る人々を迎えたので、個々の謁見は通常、数分に過ぎませんでした。皇帝は僅かに頭を傾け、謁見の終わりを合図しました。

61会議室

ここでは「ミニスター・コンセイユ」と呼ばれる大臣会議が行われ、皇帝自ら常に議長を務めました。 後方の壁龕（へきがん）横に見られる大理石の胸像とサーベルは、王朝時代の最も名高い軍人のひとり、ラデツキー将軍を記念するものです。けれども、彼の名を世界に広めたのは、ヨハン・シュトラウスI世の作曲した「ラデツキー行進曲」です。 大きな絵画には、1849年のハンガリー革命における戦闘が描かれています。 開けられた扉を通して、皇帝の衣装室が見られます。皇帝存命中は、この部屋に、皇帝の衣服を納めた洋服ダンスや戸棚がありました。フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、殆ど常に軍服で過ごしました。私服を着用するのはプライベートな旅行の時だけで、狩猟の際には伝統的な皮製のズボン、緑のベストにシュタイヤマルクの帽子を愛用していました。

62 執務室

フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、多民族国家の皇帝たる責務を極めて真摯に受け止め、豪華な儀式よりは日常の執務を重視し、自らを、人口5600万人に上る帝国を管理する第一の役人と考えていました。従って皇帝は1日の大半を執務室で過ごし、無数の書類に目を通し署名しました。毎日の執務は午前5時前から始まり、公式のディナーやレセプション、舞踏会などの後、深夜まで続きました。 仕事机の前と左側の壁には、フランツ＝クサヴァー・ウィンターハルターが描いたエリーザベト皇后の肖像画が見られます。彼は愛する皇后を「天使のようなシシィ」と呼び、とりわけ、これらの肖像画がお気に入りでした。
開かれた布張りの扉は、皇帝の部屋付き侍従オイゲン・ケッテールの部屋に続いています。彼の職務は、皇帝の身の回りの世話をすることで、常に皇帝のために待機し、執務室に朝食や軽い食事を運びました。

63 皇帝の寝室

皇帝夫妻が別々の寝室を使用するようになったため、この部屋が皇帝の寝室として内装されました。フランツ＝ヨーゼフが使用したのは簡素な鉄のベッドで、ここにも皇帝のスパルタ式生活態度が反映しています。フランツ＝ヨーゼフ皇帝の日常生活は、早くも日の出前の午前3時半から始まりました。前夜に大きな公式行事のあったときだけ、皇帝は1時間余分に眠りました。毎朝、先ずゴム製のバスタブが寝室に運び込まれ、入浴係が皇帝の入浴を手伝いました。ベッドのそばには、簡素な洗面台が見られます。フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、プライベートルームに簡素な内装を好んだばかりでなく、あらゆる贅沢を無用の長物と考えていたのです。服を着た後、皇帝はベッドの脇の祈祷台に跪いて朝の祈りを捧げました。皇帝の朝食は、早くも執務室に運ばれました。

64 大サロン

皇帝の他の部屋同様、内装の大半は18世紀に遡ります。他方、家具類はフランツ＝ヨーゼフ皇帝時代に作られました。王宮内の全ての部屋と同様、ここにも磁器のストーブが見られます。古い時代には、部屋を汚さないため、裏の通路にある焚き付け口から、王宮ストーブ係が燃料を燃やしていました。ようやく1824年になって配管工事が行われ、ストーブを加熱するため、熱風が送り込まれるようになりました。

65 小サロン、メキシコ皇帝マクシミリアン記念の間

フランツ＝ヨーゼフ皇帝の時代、この部屋は紳士のための喫煙サロンでした。当時は貴婦人の前でタバコを吸わないのがエチケットだったのです。今日ここは、フランツ＝ヨーゼフの弟でメキシコ皇帝となったマクシミリアンを記念する部屋となっています。右側の壁には、マクシミリアンの肖像画が見られます。1864年、彼は皇帝として即位するため、妻のシャルロッテとともにメキシコへ向かいました。ベルギーの王女だった彼女は野心家で、メキシコの極めて困難な政情にもかかわらず、皇帝となるよう夫を説き伏せたのです。彼女の肖像画は、左の壁に見られます。ところが即位から間もなく、フランスは約束していた援助を撤回しました。全く孤立したマクシミリアンは、ベニト・フアレス率いる革命軍に捕らえられ、1867年に銃殺されました。
皇帝の居住空間は、ここで終わります。

66 エリーザベト皇后の住まい、居間兼寝室

1857年からエリーザベトは、アマリエンブルクの2階を住まいとするようになりました。 エリーザベトは、この部屋をプライベートな居間としたほか、寝室としても利用しました。ベッドは部屋の中央に置かれ、ついたてで仕切られました。背後の窓際に置かれた机で、彼女は手紙のほか、膨大な量の詩の幾つかも書いています。 現在、机の上には、彼女の遺言書のファクシミリが置かれています。

67 化粧と体操の部屋

化粧と体操の部屋は、エリーザベトにとって最も重要なプライベートルームで、彼女は大半の時間を、ここで過ごしました。 左には、エリーザベトの化粧台があります。お付きの美容師が髪を結う間、彼女は毎日2～3時間この前に座りました。この時間は、読書と語学の勉強に当てられました。エリーザベトは英語とフランス語のほか、ハンガリー語を完全にマスターしていました。エリーザベトはギリシャ古典と神話の熱烈な愛好者でした。化粧台の脇にある小さな椅子には、大抵の場合、ギリシャ人の朗読係コンスタンティン・クリストマノスが坐り、長い髪結いの時間に「オデュッセイア」か「イリアス」を朗読し、また皇后のギリシャ語を添削しました。彼女は古代ギリシャ語に加え、現代ギリシャ語もマスターしていました。 この部屋で皇后は、そのスリムなボディーラインと健康を保つため、毎日体操に励みました。これは、当時としては驚くべきことで、宮廷人からは全く理解されませんでした。ここには、肋木、鉄棒、扉の枠に取り付けられた吊り輪が見られます。

68 トイレ

化粧室の次には、エリーザベト皇后の極めてプライベートな部屋が続きます。通路の右手には、皇后のトイレが見られます。これは、当時としては最もモダンな水洗トイレでした。イルカをかたどった磁器のトイレの横には、小さな手洗いも見られます。

69 バスルーム

1876年エリーザベトは、化粧室の背後に、現代的な意味でのバスルームを設置させました。これは皇帝家のメンバーとして最初の画期的な出来事でした。左側には浴槽が見られます。これは銅に亜鉛メッキしたものです。コックなどの部品は残されていません。ここでエリーザベトは通常の入浴のほか、スチームバスやオイルバスを楽しみ、血液の循環を良くするため冷水浴も実行しました。この部屋では、エリーザベトの洗髪も行われました。これは1日がかりの大作業で、卵の黄身とコニャックを混ぜた特製シャンプーが用いられました。特に興味深いのは、リノリウムを用いた床張りで、当時発明されたばかりの新建材でした。ここからベルグルの部屋に、お進みください。ベルグルの部屋は、更衣室として使われていたものと考えられます。

70 ベルグルの部屋

ベルグルの部屋という名称は、画家ヨハン・ベルグルに因むものです。エキゾチックな動植物を配した風景画は1766年にベルグルが制作したもので、ファンタスティックな南国の自然に入り込んだような印象を受けます。少し時間をかけて、生き生きと描かれた小さな小鳥や蝶、果物など、風景の細部をゆっくりご覧ください。 次の部屋はエリーザベト皇后の小サロンです。その前に、左手にある部屋番号71の大サロンをご覧ください。

71 大サロン

ここは、エリーザベトが来客を迎えるサロンでした。コーナーに置かれた大理石像は、イタリアの彫刻家アントニオ・カノーヴァが制作したポリヒュムニアで、1816年ロンバルディア＝ベネト王国からオーストリア皇帝フランツI世への贈り物として、ウィーンにもたらされました。 また、ここには朝食のテーブルが再現されています。皇帝夫妻は、時たま朝食をともにしました。その様子を描いた当時の絵も、ご覧ください。

72 小サロン

ここはエリーザベト皇后の小サロンです。当時ここには、フランツ＝ヨーゼフ皇帝、皇帝夫妻の子供たち、ギーゼラ、ルドルフ、マリー＝ヴァレリーの肖像が飾られていました。内装はオリジナルですが、現在は、30才で自殺したルドルフ皇太子の肖像画が飾られています。

73 大きな控えの間

エリーザベト皇后は、隣接するレオポルト宮の「鷲の階段」を上がり、警護官の部屋と控えの間を通って自らの住まいに入りました。 壁に飾られた絵画は、18世紀前半マリア・テレジア時代のものです。当時の様式は、フランツ・ヨーゼフ皇帝の時代にも、ネオロココとして、ホーフブルク王宮の内装に用いられました。 2つの絵画には、名高いオペラの場面が描かれています。グルックの「混乱したパルナス」とガスマンの「愛の勝利」で、マリア・テレジアの子供たちが演じたものです。1枚の絵には、マリア・テレジアの末娘マリー・アントワネットがバレリーナとして描かれています。

74 アレクサンドル皇帝の部屋/通路の部屋

ここはアマリエンブルクの北側で、バルハウスプラッツの広場に面しています。1814年から1815年にかけて、ヨーロッパの国家元首が一堂に会したウィーン会議開催中、ここには、ロシアのアレクサンドル皇帝が滞在しました。エリーザベト皇后の時代、彼女のプライベートな来客が、ここに通されました。また1916年から1918年まで、オーストリア帝国最後の皇帝カールI世が、ここを執務室としていました。 通路の部屋には、エリーザベト皇后へ贈られた品物が展示されています。ひとつは豪華なケーキ用の秤で、もうひとつは、1860年に作られたオーストリア最初のミシンです。

75 赤いサロン

皇帝カールI世のレセプションルームに当てられたこの部屋は、パリのゴブラン工房で作られた豪華なタペストリーで飾られています。メダイオン部分は、フランソワ・ブーシェの絵画に基づくものです。タペストリーは、フランス王ルイ15世から、義兄の皇帝ヨーゼフII世に贈られました。銀器コレクションのところで既に聞かれた通り、皇帝は、子供に恵まれなかったフランス王に簡単な手術を勧めたのです。

76 ディナールーム

ここには、フランツ＝ヨーゼフ皇帝時代の家族的ディナーのテーブルが再現されています。大規模な公式ディナーは、専ら大きな式典の広間で催されたのです。このテーブルも「最も高貴な食卓」の規則に基づいてセットされています。ごく内輪の食卓でも、厳密な仕来りが守られました。テーブルは常に豪華に飾られ、中央には、花や果物・ボンボンを盛り付けた金メッキのセンターピースが置かれました。銀の受け皿には、芸術的に折りたたまれたダマスト布のナプキンが置かれました。食事ごとに別の器が用いられ、スープとデザートは磁器で供されましたが、他の料理には全て銀器が用いられました。銀のナイフ・フォークには、双頭の鷲が見られます。食事ごとに別のワインが供され、その都度グラスも替えられました。緑のグラスには、ライン地方産のワインが注がれました。また皇帝一家の一人一人に、専用のワイン容器、水入れ、塩入れがありました。料理を温かく保つため、宮廷の厨房で作られた料理は温めた箱に入れて運ばれ、ディナールームの隣室で、炭火で温められました。後には炭に代わってガスコンロが用いられました。

皇帝は中央に坐り、その向かい側が主賓の席で、更に親族の序列と身分に従って席が定められました。女性と男性が交互に坐り、隣の人とのみ会話が許されていました。料理は、皇帝にも他の人々にも同時に給仕され、皇帝は、すぐ食事を始めました。皇帝がナイフ・フォークを置くと当座の料理が取り下げられる規定だったので、皇帝は常に、食卓の全員が食べ終わるのを待って、ナイフ・フォークを置きました。ディナーには通常9品から13品の料理が供され、最大限45分でした。コーヒーとリキュールは別の部屋で供され、紳士には喫煙が許されていました。

皇帝の部屋見学コースは、この部屋で終わります。ウィーンの宮廷における皇帝一家の日常生活に関心をお持ちの方は、ぜひ宮廷家具博物館へお出かけください。宮廷家具博物館には、ハプスブルク家の様々な宮殿で使われていた多彩な家具類とインテリアが展示されています。皇帝の部屋見学コース出口の向かい側に地下鉄U3番の駅があります。宮廷家具博物館はここから5分、3つ目の駅ツィーグラーガッセ下車です。また、皇帝家が夏を過ごしたシェーンブルン宮殿の見学コースもご覧ください。外に出られる前に、必ずオーディオガイドをご返却下さるよう、お願い申し上げます。外へ出られるとバルハウスプラッツの広場です。すぐ横は大統領官邸の入り口で、向かい側には総理府があります。出口にある地図で現在位置をお確かめください。

王宮見学コースにお越しいただき、まことに有難うございます。皆様のご来訪によって、膨大な施設が維持されています。この後も、ウィーンで快適な日々を楽しまれるよう、心からお祈り申し上げます。

© Schloß Schönbrunn Kultur- und BetriebsgesmbH, 2012